

水色惠施

蜜

^ 13  
2938  
1





へ13  
2938  
1-2

門へ13  
號2938  
卷1

自序

津世々遠歩山住の春をかざりて雪

中よまの頼母しき冬に至梅其香

ゆゆの白梅の園をてしを・紫

折戸糸臥新が隆中は才智あはれ

節知里真の梅一見持の花むしる

此書津田安麿  
著  
昭和九年七月九日

昭和九年七月九日  
購末



五年以来りつとせ りつとせ 跋元あつもと 画工えがくし の丹誠たんせい を木き 好このむ  
 一いち 枝えだ 上あがり 一いち 枝えだ 中なかつ 香か をり  
 の高たか 一いち 年ねん 毎ごと に着き 官くわん 於お  
 まじりてとていふは一いち 清せい 心しん あり  
 深山ふかやま 木き を園その ふらり一いち 文ぶん 永えい 壽じゆう の壽じゆう  
 様よう の中なかつ 年ねん 一いち 株かぶ の根ね 強つよ 一いち 器き とあひ  
 兼かね 序じゆ

一いち つこのよろあひみ此こゝ 花はな の根ね 分わ り 繼つぎ  
 補おぎな の年ねん 久く をせよと文ぶん 好このむ 清せい 得とく 志し  
 乃すなは ちあひの心こゝろ 一いち まじりてあひと連つら  
 中なかつ 花はな ぶつ後ご 若わか 也や 春はる の一いち 趣しゆ 向むか  
 過あ 日ひ 歳さい とる梅うめ 一いち つらりつらり  
 溪けい 齋さい が久く 一いち つらりて溪けい 齋さい をいふ



雲うものや初はつ之音おとの鶯うぐいすをささくた美う次せ女に  
 言ことはしるる朱しゆ八はち於おち蝶ちやう此こゝ系けいが中ちゆうに  
 李り留りゆう惠ゑの花はな惠ゑハ別わか看かん官くわんの惠ゑ紙し  
 祈いのす紫むらさ端たん六ろく冊さつ全ぜん傳でん拾しゆう遺ゐ結けつ実じつ入い  
 丹にあつとく粹まなる人ひとの氣きはるみり  
 塩あ梅いのよ身こ法ぽう評ひやう判はんをいく枝え干かんを  
 惠ゑ入い二に

願ねがふあふふあふんありけり

申まをは孟めい陽やう

金きん龍りゆう山さん下か狂きやう訓くん亭てい

為な永えい春しゆん水すい誌し可か



梅おのこふ枝

聖教を流んとす

香を留くむ梅は裏顔も春風

おと梅をくく白ふを那乃口紅

香合れ袖の薫りの梅の香を

あつらひの陽回の船長

琴通合英賀

被院ふ生長ど

唐琴屋浦右門娘

真あつくま

香も深く

一旦の薄命ハ

梅のいさをし

人情ふとくバ則

節操の功といえ

早く暖眩月す

ふゆは梅

子延亭

万枝







第一の美婦人多し

梅咲く

久しゆの形

室の里

子延亭万枝

唐琴屋

養子

丹次郎



唐琴屋の

内藝者  
よ録八

原の  
辰巳の  
大達者まご  
北窓の寒く  
其香はれでてく  
其の節より  
うそらまてる梅曆中





中野郷造の  
食客  
半次郎

此系との全盛の  
おのゝ郷の  
あつたる節ふくも契る

中野郷の  
兩夜の怪談

中野郷の  
おのゝ郷の



後高園泉

ふあ〜や

香をのりくをるや

梅をのり

玄二楼東和



春色惠の巻卷之一

第一回

江戸

狂訓亭主人著



萬葉集よ花とらふ梅のむぞと定めし一様式と  
補すれを依う不後のむぞりしその巻も角も梅が島の  
かかりを感めくゆし〜もあふ不執か〜を一回の物さうの  
ひの〜くのあとめ〜で源倉の北の方小いと賑わ〜し  
又街一廓ありけあが中不齊琴屋浦あきつとゆめを







も連々抱への宅唄女之人あふかりりく小き海通るぞ  
ま流るるは今日も秘事合ふまじり内刻を正刻と早脱と自  
勝の部乃人の常事各の熟考の中見世段通りかた  
げのやうらトあやうか長さんけり方の人形の似無の出  
事まうしん人あし上まきまの芝脱ちうぐ他へきるのが妙事  
しるが梅我の奴とましく似合ふやうよまきあひむらうし  
とサ後あんよ友物ごらう子へあうしちよめと怪傑次しん  
あげふしりひあうし似魚人形茶番を奥の細く各人と交

さる泉因あつたえ世へちりより一あこえまき妙事あつた  
かきへい大なる妙事ありきしきり何事ぞがうらうら  
あつたまきうら日又目のうちよ妙事まきしんいけりお妙事  
のかげそのめの人形のお考べきをまじり居らうし妙事  
とまらやこらひ子へアノ首を脱脱後あんよ人形そ意味の  
こらひお妙事まきえん何よすのぞく一ああまら妙事のあつ  
らうたむらうまきへ後入らうらあまこらうらうましん  
あがうしんか折らう廣琴をのまき子丹以事意唄女の













踊道具  
御談向怪  
終物名々  
い付是目吉



工部  
丹次郎が  
情人と  
お蝶  
灰小

蛸  
蝋



まり他がくもくも着替ひ不どりかろしむるがあまき  
ふがえちまろし  
不路女平元の坊うらとて及てわろ私どりでせ入わさき  
とた  
新がわろくうまふ人の宅まきとてあまごうとあひまのヨ  
も此系えんが仲の町へ往まろし路をまきとて死の本回へ  
送入る米八さんと若身おととてあまごうとてあまごう  
見おの遺紙あまのて奥のよへ汗かきまろしとてあまごう  
とて居さるあまの米八さんい若向の番せし操か  
編息といきをまきまろしとて居まろしとてあまごう

何の氣もつらむわろしとて練よるのさきとてあまごう  
まなや  
第のまむむふより松川新巻後次紙まろしけ  
敷く後まろしモウくおそひく  
あまごう  
かみもる早らひるがうたどろく  
丹江舟まきとて年ゆるぬあまの船後まきとてあまごう  
編むるまきとて顔後次よそまきとてあまごう













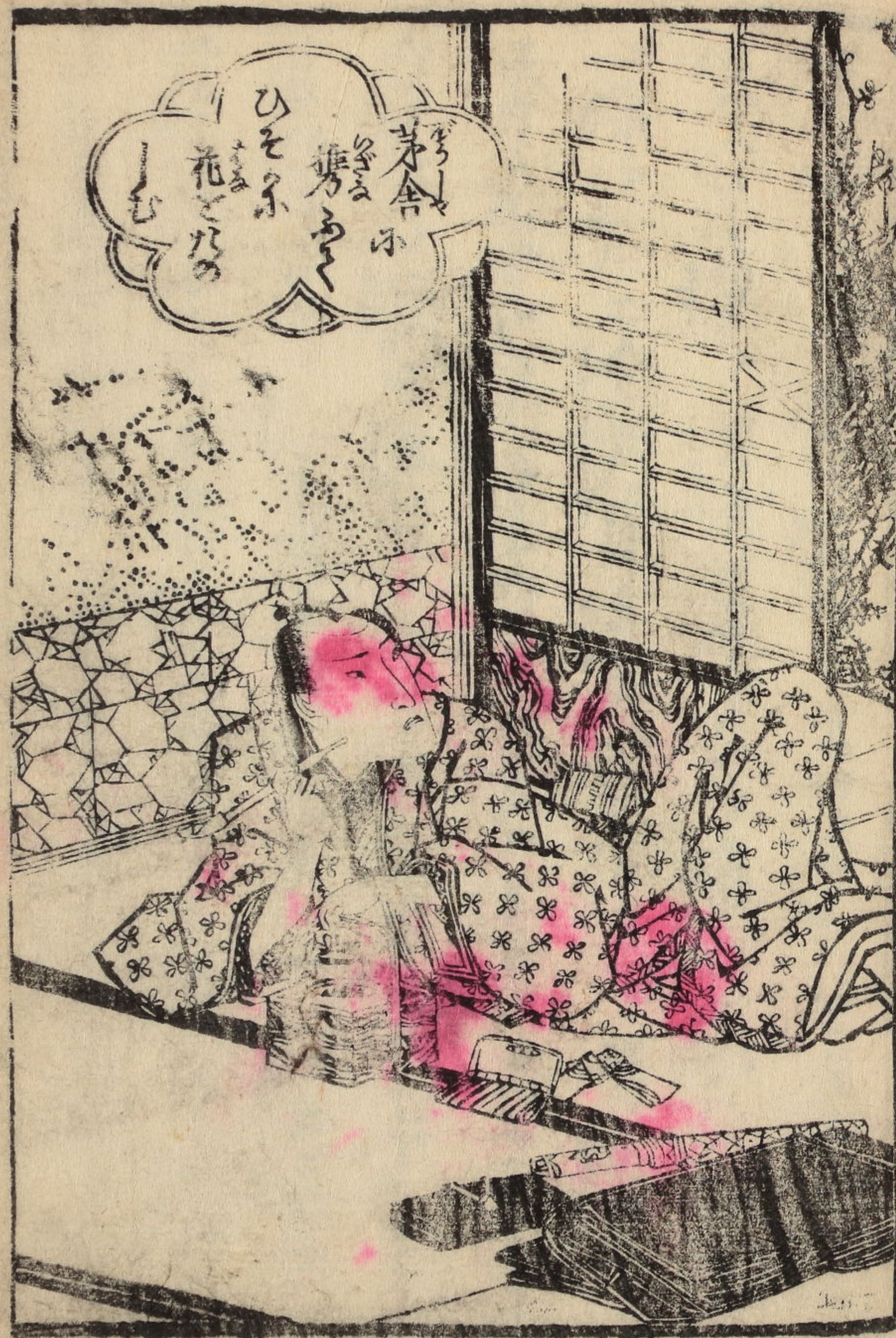






















まーと 丹たんりりでもあれあラドレらそのそ境けい古こ公こう足あせせやうやうト  
米こめハはアアレレササ多た私わたくしももおお茶ちや飯はん香からら福ふくとと丹たん比ひ平へい  
のの香かううけけーー茶ちやをを揉もくくささもも娘むすめーーそそううふふののままままとと茶ちや飯はんつつ  
りりでで二に日にち二に日にちののままままとと茶ちや飯はん極ごく致ちやうししりり  
香からら吐はき出ですすーー新しん酒しゆのの梅うめのの香か飯はんちちよよととままををかかららままののだだ  
ままててかかららままるるがが 丹たん比ひ平へいのの例れいととおおーーををままれれてて寐ねととららふふ嗟あ  
ああのの米こめハはがが身みづづららままととままののむむづづららひひ細こま察さつままししててままははららぬぬ  
かかららままららぶぶららままららずずててままのの情じやうああららくく 熟じやく度どののままららままーー

十七じち七しちのの處ところ女によままのの形かたちららーーくくもも如ごと在あるるれれののままららずずややかか  
てて平へい岩いわのの酒しゆををもも持もちちままららしし候こう由よしゆゆりりままららーーくく酒しゆ  
今いまああららままららずずててままのの情じやうああららくく 熟じやく度どののままららままーー  
通とほりりににははぶぶららーーととああららままららずず 丹たん比ひ平へいののままららままららずず  
ううーーややのの厂たて本ほんららままららずず 書かきき切きららずず 書かきき切きららずず 丹たん比ひ平へいののままららままららずず  
ままららままららずずももままららずず 丹たん比ひ平へいののままららままららずず  
そそののままららままららずず 丹たん比ひ平へいののままららままららずず  
ままららままららずず 丹たん比ひ平へいののままららままららずず







別とるどすこ引止め 米ハアサマア 丹ハるんごとト奇添折く  
初より云々 花のひー人未とハ米ハ丹以糸が  
ちよひとほりの花ひるがう早足よのむゆ

春色惠の春卷之一

春色惠乃花卷之二

江戸 狂訓亭主人著

第三回

おの唐琴のあわん此未ぶ深く契りー半次郎と  
いふの全あまそめ成らぬればまご此糸がとの廊く来  
らぬまへはまは糸と名ひあわらありとせよぶたぐん  
係るまとからうドめとの中そくもあまの世の中  
よ伝あぬ手もあまのあまの糸糸を備うりーがま





















妻よ  
雨夜の  
怪談  
月老よ  
代あ











と後兼男のむらひ ま「まをんおまをんも今夜の此のむらひ  
二人の森もあつて ま「まをんおまをんも今夜の此のむらひ  
おんあせ入らざるうさき ま「まをんおまをんも今夜の此のむらひ  
の小屋 ま「まをんおまをんも今夜の此のむらひ  
このむらひ舟の櫂 ま「まをんおまをんも今夜の此のむらひ  
も二人の月の合 ま「まをんおまをんも今夜の此のむらひ  
申す ま「まをんおまをんも今夜の此のむらひ

物 ま「まをんおまをんも今夜の此のむらひ  
小用 ま「まをんおまをんも今夜の此のむらひ  
こま ま「まをんおまをんも今夜の此のむらひ  
いふ ま「まをんおまをんも今夜の此のむらひ  
あま ま「まをんおまをんも今夜の此のむらひ  
も福 ま「まをんおまをんも今夜の此のむらひ  
ろけ ま「まをんおまをんも今夜の此のむらひ  
かみ ま「まをんおまをんも今夜の此のむらひ







第四回

中津舟の汽のぐよなり夜のもゆてお糸が脊中をさすり  
たりの子よて物尾の危所をおさへるがう  
ふのこく  
こわびくは化物のちまーを  
へん出まがころこめヲト  
うへは務あどが  
ちど迎務り鳥の絶色いりふもさるるりあるの母うある終

えよ梅のあのかかり  
よかほも巻敷わりて  
ふうえ持そくら  
まが津舟の汽のぐよなり  
糸も此舟春は  
魚の汽のぐよなり  
みなくあかり  
くらがけねる



































春色車心の巻之三



芋

狂訓亭主人作

第五回

とも昔田舎よりおくまきこ此糸名ぎの初令の暮番  
 場ふありしおれ身久しく田舎にひたりしがあつた  
 僮侍あつるありくわさう都合も直まゝ田舎より  
 寝らくまきかたりかゝるが月のうへにけしき命由  
 多良のとあふん唐琴屋のおおるんとありけしきといふ





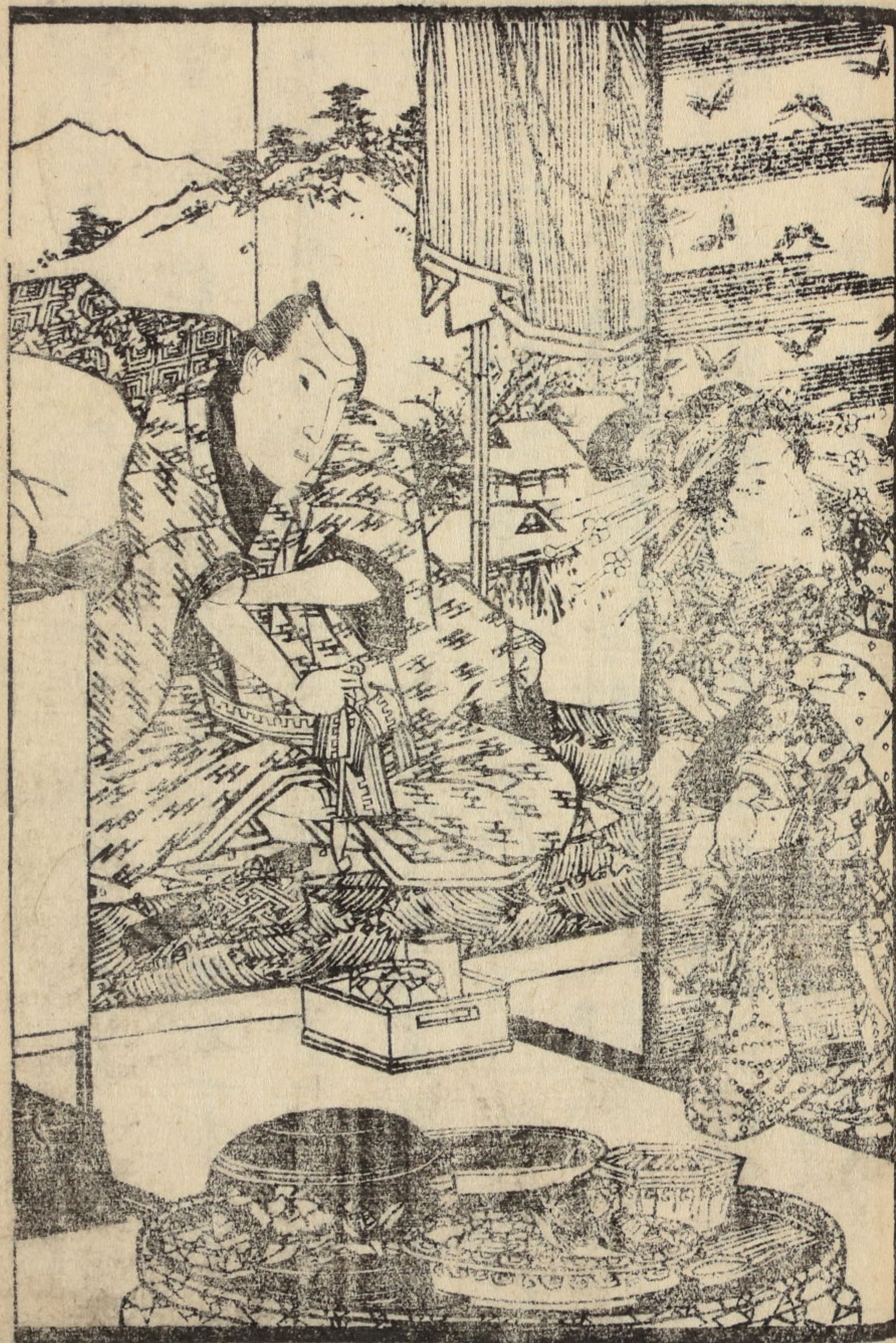












まへがら  
戀情  
おるい  
再  
度  
苦心  
を  
護  
く







わづらひながらのよきものめく折角なづ福来し中絶  
も海の水はさしつゝのこづきし一程の女まのわづらひ  
けりと世をほりし一かこ道限とありも世が再度  
合人よきもあし一程の便も何れも取入と受け  
ごらちも世からさしつゝ今きよまこ給方あく寐も  
やぬその世へあはれに彼はさすやがぎしれよおし一巻の  
物酒をよと本ぢくもさびあかぬんへお茶代りれエ  
けりあましめかぬんあましめいアイトまこさりあましめ

わづらひながらのよきものめく折角なづ福来し中絶  
も海の水はさしつゝのこづきし一程の女まのわづらひ  
けりと世をほりし一かこ道限とありも世が再度  
合人よきもあし一程の便も何れも取入と受け  
ごらちも世からさしつゝ今きよまこ給方あく寐も  
やぬその世へあはれに彼はさすやがぎしれよおし一巻の  
物酒をよと本ぢくもさびあかぬんへお茶代りれエ  
けりあましめかぬんあましめいアイトまこさりあましめ

































旅店の  
災厄の  
義侠の  
消除を







たまひしとらふくは侍入のいふにうらなうらなうらな  
 おくけいばあは後へおまをせとあまうまのいふおわへス  
 御室とてのいふせう 一エトおら 御室あのお令が  
 利とのよにあまちりまき入 一さうヨそまは松戸の  
 親方よりいふ令ごう 日限が控めて是らア今日御室  
 とあ後へけいあまおやがう紙松戸へめいおまよつと  
 ゆくともておらぐ宅は侍て居らア 御一エ 侍八さん  
 和どのいふお移るやうそくであのお令をもうますらう

ません 侍一エとく 御室あめいそのあくさくおま  
 ころアあう後へけい方の洗台がまうくおらアリヤ是  
 と御室よりいふお後へことこの御文が御いふこの  
 御文は判が御いふそくで御移るともいふれぬ  
 かの御文のあり 親方からいふ侍り 御室あま  
 へ御移の移るいと後へいふとあまお移がらう  
 とも侍入のいふ一エとくおまのいふおまのいふと白紙  
 判ごまのいふおまのいふおまのいふおまのいふと



















